
漆黒

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒

【Nコード】

N42900

【作者名】

宇ノ鹿 すい

【あらすじ】

漆黒に向かって地に落ちたというお話？

男は昔から最高だった。

生まれた時にはみんなから歓迎されていたので彼は、

「おぎゃあ！」

と元気良く鳴いてみせた。病院の天井の染みが少し黒いのが気に食わなかったが、それはみなかったことにしてやろうと思いつつ、彼は周囲を一瞥してみせた。そこにいた全員のどの面も彼は気に食わなかった。それで彼は舌打ちをしてやりたかったが、舌打ちなどをして周囲の機嫌を損ねては周りに何をされるかわからぬという恐怖からそれは控えた。『弱者には弱者なりの処世術があるんだよ』脳裏で呟きながら、彼は己のこれからの先行きが明るい人生へと思いを馳せた。

『弱者を極めた俺に敗北はあり得ない。周辺を常に観察することで、上手く世渡り…』

周りの人間の内の誰かが、今、一瞬、不愉快そうに眉を潜めたのが見えたので彼は不安になった。俺の演技の鳴きがばれたのだろうか…。焦りが生じたので彼は急いで微笑みを浮かべると同時に大きな鳴き声を上げてみた。可愛らしく、周りから愛されるような鳴き声を演じてみせたつもりだった。

『どうだ。俺の演技はもう既に完璧なる領域ではないか！ 弱者を極めた俺には失敗はあり得ねえんだよ…』

だが男の予想に反した展開。周辺の誰もが、世界の何よりも愛されるはずの鳴き声を上げた彼に向けて、不機嫌そうな表情を見せたのだ。…なに…こいつ…みたいな。

「気持ち悪い鳴き声ね。捨ててしましましょう。この村の汚点となりかねない」

「そうだな。捨てるに限るよ。成長しきってから辛い人生を送るよりは、今の内に殺してしまっただろうが彼のためになるからね」

「うふふうつふふふうつふふふ」
(みんな笑ってたって)。

彼は殺されたのだそうだ。ナイフで一突きで容赦なく。
明るい人生の旅路が、そこで幕を閉じて彼は漆黒へと突き落とされた。

漆黒ではまず仕事を与えられた。どんな仕事かというと。

まず、穴を掘る。誰の？ 見知らぬ人の穴を、掘るのだよ…。
腹の、穴。おへその部分から毎日、ゆつくりと彼の穴を、広げて
いって。

最後にはなくなっちゃう程に。最後は頭部を掘ることになる程に
穴を押し広げていくのが、仕事となっている。それは拒否できるこ
とじゃないから受け入れるしかない。だから彼は文句一つ言わず腹
を掘るしかなかった。人間を掘るしかなかった。その内に、血の臭
いを臭いとして感知しなくなった。人の死臭を臭いとして認知しな
くなった。その快感に酔いしれるようになった。

『俺は生きていながら死骸の臭いを我が物とした。つまり、俺は死
んでいながら生きている。生きていながら死んでいる。ということ
は、超越しているということだ。何を？ 生死を、だ』

男は感動で身を震わせながら、再び流れ込んできた別の身体の、
穴を広げた。

長い間ね。随分と長い間ね、穴を掘り続けて。遂に彼は、自分の
穴を広げてみたくなった。

『身体を広げたら身体は消えてなくなる。そしたら俺はどうなる？』
わからない。だから、穴を広げてみなくちゃ答えは出ないのだ。
だから俺はやるよ。

やるよ、おれは。

『命じゃなくなって、身体もなくなった。じゃあ後残っているのは

魂ということだろう』

呟きながら彼は地獄を旅することになった。視界はあつたし聴覚も嗅覚もあるようだった。ただ自分の身体にあたるものは視線を動かしても見えないし、声を発することだつて出来ない。彼に残されているのは「意志」だけのようであつた。

小・悪魔と呼ばれる小さなライオンみたいな連中がたくさんいて、そいつらが囚人を監視する役割を持っている。漆黒ではそいつらがスネオで、大・悪魔がジャイアンということになる。だから囚人たちはのび太だ。ドラえもんはどこにいるかと言えば、ここは漆黒だからドラえもんなどいないのである。だから囚人たちは徹底的に不幸を焚き付けられている。だけど救いは無い。ひたすらに悪魔たちが彼らの精神を崩壊させるべき行いを繰り返している。

『汚れているね。もうだめだね、この世界は。さつさと現世へ逃げちまおう』

そう思つた彼は「意志」を念じた。現世に行きたいなあと三回くらいは呟いた。

だけど彼は一人ぼっちでしかも何の力も持たない。

だから意志は小さくて弱々しくて、魂がほんのちよつぱり宙に浮かんただけのこと。現世に帰れることはなかった。結局、彼は漆黒に留まり血涙を流すほか道がない。

この漆黒で、彼は生きていかなければならない。

障害を持っている人が真剣に生きている真横で、健常だと認定されている多数派がアイスクリームをペロペロ舐めていた。障害を持っている人はアイスクリームを食べる余裕さえも持たない真剣ぶりだが、厄介だったのは、彼の耳にアイスクリームを食べる音が煩わしく耳障りだったことだ。

なぜならその健常者たちはおしゃべりに夢中だったから、音に気を配ることができなかったのだ。だけど、彼らは楽しんでいた。タハハ、と本当に楽しそうだった。だから障害を持っているその人は、

健常者たちを注意することも叶わなかったし、する気力さえも失われていた。

そんな彼が天井を見上げて気を紛らわした瞬間に、視界が真っ黒になった。何事か、と彼は思ったがそのまま意識が途絶えて、漆黒へと落ちた。

漆黒へと落ちた彼は、穴を掘られる役割を担わされた。男は穴を開けられ、身体を失った。その結果、彼は魂として漆黒を漂うハメになって、早十年。魂は魂を発見した。穴を開けられた側と穴を開けた側、その二つの魂が出会った。

「ねえ、そのあなた。君も魂だけとなった存在なのでしょうが、近頃のことは覚えていますか。最近、何も思い出せなくなってしまうんです。いつからだろうなあ。だけど、僕はもう全てを忘れてしまったようで、毎日、辛いんです」

「忘れた……」

片側の魂は目の前の魂が全てを忘れていることを憎く思ったが、その表情の前には出さず笑顔で押し通そうと試みていた。己の素性を明かさぬようにしようと。昔穴を開けられたことなど水に流したフリをしよう、と試みた。

そしてこういった。

「旅に出てみませんか？」

全てを忘却した魂は答えた。

「旅って、何ですか？」

二つの魂はその内に旅に出た。漆黒の中で光を模索し、結果として、平原に飛び出た。だが、そこが本当に平原と呼べる場所なのかどうかはわからない。その地面には草が生えているわけではない。そこには枯葉が詰まっているのだ。空には黒々とした暗雲。漆黒にしては明るい場所だが、やっぱり薄気味悪いというか、鬱蒼としている平原だ。床に枯葉で、天に暗雲だなんて、生命が生きていける

わけがない。でも、そりゃそうだ。漆黒には生命はいない。身体もしくは魂があるだけだ。身体もすぐに穴を開けられる運命だしね。

老人小・悪魔がそこで入場料を請求した。二つの魂に。

「あなたの魂を少しだけ分けてくれれば、あなたがたはここを通行して住処にしてもよろしくなる。魂の欠片を私に渡してくれるだけでよしいのだから、安いものだよ」

二つの魂は戸惑ったが、全てを忘れている方の魂が頷いた。

「ここに住みたいから魂の欠片を渡すくらい構わないよね。この場所は良さそうだ」

「…そうか？」

戸惑いつつも、魂の欠片を渡した。その時、

「魂のちぎり方を忘れた」

と魂が言った。もう片方の魂は、

「じゃあ君のぶんも払っておいてあげるから、あとで返して」

と気前よく、二人分の欠片を己でちぎってみせた。老人小・悪魔は皺で隠れた目を見開いてから、

「ほう。性格の良い魂だな。他人の分もちぎってみせるなんて、珍しいよ。向こう見ずだね」

と言っていた。こうして二つの魂は、枯葉ばかりの平原に入り込んだ。

しばらくそこで住むことにした。魂の身だと、案外枯葉も心地よいということだ。

ある日、二つ分欠けている魂が、全てを忘却している魂に申し出た。

「俺、体調が悪い。魂が欠けてしまっているのが悪いんだと思う。

君、まだ魂のちぎり方を思い出せないのか。俺、ちよつと気持ち悪いんだけど」

しかし忘却している魂は、

「すまない。思い出せないみたいだ」

と申し訳なさそうに俯いた。

ある日、地面から巨大な虫が出て来た。それは気持ち悪くウネウネしながら、二つの魂に襲い掛かった。その結果、全てを忘却した魂は食われてしまった。

「うわぎゃあ」

と言いながら、魂は滅んでしまった。そして全てを忘却した魂は、一言、食べられる直前にこう叫んでいたのだった。

「嘘の代償だ！　だけど俺は後悔なんかするものか！　どうせ死んでたんだし！」

こうして、全てを忘却していた魂が、本当は嘘つきの魂だったということが、三日月型に欠けてしまっている魂には理解できた。

彼は怒りに燃えて嘘を憎んだ。二つ分欠片を払ってやったのに、と思った。

だから彼は自ら三日月ブーメランとなり、巨大な虫の腹をちぎってみせた。

「うわぎゃあ」

と言いながら滅んだはずの魂が巨大虫の腹から飛び出てきた。

巨大虫は死んだ。

嘘つき魂はしばらく気恥ずかしそうにもぞもぞしながら、枯葉の中に逃げ込もうとした。だが、三日月ブーメランは回転することで上手く嘘つき魂を掬い取った。こうして嘘つき魂は捕らえられてしまったが、嘘つき魂の方が魂として健常だったので、三日月ブーメランから簡単に逃れることが出来た。

（俺が欠けているからあいつに逃げられた。現世と同じように漆黒でも、俺は欠けている。だから三日月となって、俺はあいつを嘲笑するべきかな）

（俺は現世でも嘘つきだったが漆黒でもそのように生きることが出来た。だから俺は満たされているが、あいつは馬鹿だから三日月になっちゃった。俺はあいつを嘲笑するべきかな）

微笑と微笑が衝突を起こして洪水を巻き起こし、台風を巻き起こ

し、枯葉全てが地面より舞い上がって踊り狂う。意志と意志はぶつかり合って漆黒を揺らし、天の暗雲は稲妻を鳴らす。

拳がぶつかり合い、嘲りがぶつかり合う。

力のある魂は力の欠けている魂を押さえつけようとするが、力の欠けている魂は柔軟に相手から逃れてみせる。力の無い魂は力のある魂を技ありな感じで押さえつけようとするが、力のある魂は強引にそこから逃れてみせる。

互いの長所が互いのわざとなり、片側から見れば片側の長所は短所に見える。

やがて舞い上がっていた枯葉たちは、なぜか、緑色に潤い、暗雲も、何時の間にやら真っ白となった。ご都合主義が完全に漆黒で舞い上がり、彼らの意志のおかげで世界が変わるというGOODENDが見え始めた。そんな時に、異変が生じて全てが死んだ。

誰かが屁をこいたせいだ。

（後書き）

自分で書いてて、笑いたくなってくる。これでいいのかよみたいなでもこつというのが好き。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4290o/>

漆黒

2011年11月13日04時36分発行